小学校高学年児用社会的責任性尺度の作成

田中昭夫*

Akio Tanaka

Development of Social Responsibility Scale in Upper Grade of Elementary School Children.

ABSTRACT

This study was conducted to make shortened version of social responsibility scale (SRS) applicable to upper grade of elementary school children. Based on Harris (1957), scale consisted of twenty items were developed. Fifth and sixth grade children from two public elementary schools were participate in this study. The index of the reliability of the scale (α) was .88 and the split-half reliability (Spearman-Brown formula) was .83. Test-retest reliability, two and half month interval, was .72. Validity of the scale was estimated by the concurrent validity. The correlation between two kinds of prosocial scales (1, 2) and SRS were .55 and .57. The correlation between empathy scale and the SRS was .57. The correlation between cooperation scale and the SRS was .49. Validity was also tested by peer evaluation. Children wrote down the name of class mates who were accountable, square shooter, loyal, and effective job. The correltion between scores of SRS and results of the student peer evaluation were significant - accountable (.28), square shooter (.24), loyal (.28), does an effective job (.28) and total scores of nomination (.30). These results shows SRS have high level of reliability and validity.

【key words：social responsibility scale, reliability, validity, upper-grade elementary school children, guess-who test】

問　　題

向社会的行動を動機づける要因として共感性が大きな効果を及ぼすことが明らかにされている（Eisenberg and Mussen, 1989；浜崎，1991；松崎・浜崎，1990）。

これに対し、従来、向社会的行動を引き起こすための内的規範としての社会的責任性については、主として成人を対象にした研究で取り上げられてきた（Berkowitz and Daniel、1964；丸山・清水，1990）。

社会的責任性は、我が国で使用される責任感という言葉にほぼ対応している。例えば、広辞苑（岩波書店）によれば、責任感は、「責任を重んじ、それを果たそうとする気持ち」と定義されている。

最初に社会的責任性を測定するための尺度を開発したのは、Gough, McClosky and Meehl（1952）である。彼らによれば、責任感のある人とは、「自分自身の行動の結果を受け入れる用意があり、頼りになり、信頼に値し、集団に対する義務の感覚を兼ね備えている人である（中略）。責任感のある人は必ずしも集団のリーダーであるとは限らないが（中略）、集団や他者に対する関与の感覚を備え、頼りになり、誠実さを持っている人」（p.74）であるとされている。その後、Harris, Clark, Rose, and Valasek, Frances（1954a）は、Gough, McClosky and Meehl（1952）の項目の内48項目を使用し、責任感を測定しようと試みた。それは、彼ら（Harris, Clark, Rose, and Valasek, Frances, 1954ｂ）が、当時から今日まで一般的に信じられている「子どもの家庭内での手伝いは、責任感を育成するのに効果的である。」という信念を実証するため研究を行うための前段階として行われたものであった。こうした信念は、欧米においても（White and Brinkerhoff, 1981a; Goodnow, 1988）我が国においても（新井，1993；祐宗・堂野・松崎，1983）根強いものがある。Harrisら（1954ｂ）の結果によれば、その信念は明確に実証されていない。

数年後、Harris（1957）は、50項目から成る社会的責任性尺度を作成した。今日まで、この尺度が主として成人の向社会的行動の研究において用いられている。Harris（1957）によれば、社会的責任性は、「信頼できる、責任がある、忠実である、効果的に仕事をする」といった態度から構成されているものであるとされている。さらに、社会的責任性は、Berkowitz and Daniel（1964）によれば、「自分に依存する人を助けるべきであるとする社会的規範」であると定義されている。社会的責任性は、他者への援助規範として重要な位置を占めているという。

この尺度は、成人（Rushoton, Chrisjohon and Fekken, 1981）や児童（Midlarsky, and Bryan, 1972；Benson, Dehority, Graman, Hanson, Hochschwender,

*　島根大学教育学部初等教育開発講座

Lebold, Rohr, Sullivan, 1980; O'ccorner and Cuevas, 1982）において向社会的行動及び自己報告的な向社会的行動尺度と有意な正の相関を示すことが明らかにされている。したがって、社会的責任性と向社会的行動は、相互に関連が深いと考えられる。さらに、一時的、実験的に責任を付与すると向社会的行動が増大するという研究結果（Staub, 1970）も、社会的責任性と向社会的行動とが関連していることを示唆している。

菊池（1988）や横塚（1989）は、中学生を対象にして家庭での手伝いと向社会的行動尺度との関連を明らかにした吉田（1986）の研究を報告している。もし、手伝いの諸次元が向社会的行動と関連しているならば、向社会的行動と社会的責任性が関連しているとする上記の結果から、手伝いの諸次元と社会的責任性も関連していると予想される。田中（1993）は、Buss（1986）の社会的責任性尺度5項目版（清水・丸山, 1991による翻訳をもとに作成）を用いて、児童の手伝い行動との関連を検討した。その結果、手伝いの諸次元と社会的責任性及び共感性が関連していることを示唆した。これに対し、欧米においては、手伝いと社会的責任性との関係は、実証されていない（Goodnow, 1988）。したがって、両者の関係を明らかにするためには、より厳密な基準が必要であると思われる。田中（1993）では、社会的責任性尺度の信頼性や妥当性の検討が行われていないため、そこで得られた結論は十分なものとはいえない。

従来、Berkowitz and Daniel（1964）は、Harris（1957）の項目の内42項目を使用し、項目分析の結果22項目からなる社会的責任性の尺度を構成し、大学生を対象とした研究において使用している。また、Berkowitz and Lutterman（1968）は、8項目のみで社会的責任性を測定している。しかし、これらは成人を対象に使用されており、児童に直接的に適用可能であるとの保証がない。

したがって、本研究の第１の目的は、田中（1993）の結果をより厳密に確認するための前段階として、また、今後、児童の向社会的行動研究において適用可能にするために、本邦における児童用の社会的責任性の尺度を作成することである。そのため、Harris（1957）の元尺度を参考にしながら、小学校高学年児童に適用可能な社会的責任性尺度の短縮版を構成し、その信頼性と妥当性を検討するとともに、性別及び学年の効果を明らかにする。

方　　法

（参加者）　松江市内の公立Ａ小学校６年生児童104名（男児58名、女児46名）と公立Ｂ小学校５年児童154名（男児77名、女児77名）及び６年生児童144名（男児74名、女児70名）、合計402名である。

（調査方法）　調査用紙をクラス担任の先生に配布・実施してもらい、約10日後に回収した。

（調査時期）　1993年６月から７月にかけて両校で第１回目の調査を行い、Ｂ小学校では、10月に部分的に再検査を実施した。

（調査項目）

１．社会的責任性尺度については、Harris（1957）の社会的責任性尺度項目50項目のうちわが国の児童に適当と思われる44項目を訳出・修正し、「とてもそうおもう」から「まったくそうおもわない」までの５件法で評定を求め、５点から１点までに得点化した。

２．向社会的行動尺度については、佐藤（1986）の児童用向社会的行動尺度（向１と略）及び桜井（1990）の児童用向社会的行動尺度（向２と略）を、向１は「いつもやった」から「やったことがない」まで、向２は「はい」から「いいえ」までの４件法で評定を求め、４点から１点までに得点化した。

３．共感性については、桜井（1986）の児童用の共感性尺度を「はい」から「いいえ」までの４件法で評定を求め、４点から１点までに得点化した。

４．協力意識と競争意識については、桜井（1987）が用いている協力意識尺度及び競争意識尺度を「はい」「いいえ」の２件法で評定を求め、１点と０点に得点化した。

５．公立Ａ小学校では、Harris（1957）の方法に従って、「あなたにとってとても頼りになる人、やるといったら必ずやってくれる人」、「とてもしょうじきで、ほかの人をだましたり、自分だけとくをするようにしないひと」、「じぶんのことより他のひとのためになることを考えている人、みんなのためになるようにしている人」、「やるべき事を最後までやりきるひと、クラスの計画や委員会や仕事をうまくやりとげる人」を同じクラスから男女３名づつ筆記して指名してもらうゲス・フー・テストを実施した。

６．児童の属性－性別、学年の調査を行った。

なお、分析に当たっては、不明回答を含む調査用紙も用い、欠損値がある場合ケースワイズで削除するという方法を用いた。

結　　果

本研究の目的との関連からまず、社会的責任性の信頼性と妥当性の検討を行う。

（項目分析）各尺度の合計得点の上下約25%をとり各項目についてG－P分析を行ったところ、どの尺度のどの項目についても有意差が認められたので、この研究で用いた全ての尺度が上位者と下位者を識別する弁別力があるといえよう。

（信頼性）上記1. から4. の尺度の内部一貫性を示すα係数は、それぞれ.88 .82 .67 .70 .69 .73であった。社会的責任性尺度は、高い内部一貫性（.88）を示した。

公立Ｂ小学校の児童には、夏休みをはさむ２カ月半後に再検査を実施した。社会的責任性尺度の再検査信頼性は.74（$p<.01$）であり、再検査の期間が長いことを考慮すれば、比較的高い数値を示したといえよう。

（妥当性）社会的責任性尺度の妥当性は、第１に、向社会的行動尺度１と２、共感性、協力意識、競争意識と

の併存的妥当性によって検討した。社会的責任性尺度と各尺度との相関は、向1(.52；p<.01)、向2(.56；p<.01))、共感性（.66；p<.01)、協力意識（.55；p<.01）であり、競争意識尺度とは有意な相関が見られなかった。

このように、本研究で用いた社会的責任性尺度は、関連が深いと想定される諸尺度と比較的高い有意な正の相関を示し、競争意識とは全く関連していなかったことから併存的妥当性を持つと言えよう。

第２に、社会的責任性尺度がHarris（1957）の規定する態度を測定しているかどうかを検討するため、Ａ小学校児童のゲス・フー・テストの被指名数と社会的責任性の合計得点間の相関を算出したところ、「頼りになる」(r=.33、p<.01)、「正直である」(.28、p<.05)、「ためになることをする」(.32,p<.01)、「やり遂げる」(.32,p<.01)、「被指名総数」(.38,p<.01）となり、いずれも正の有意な相関を示した。また、被指名数と他の諸尺度との有意な相関は、全く得られなかった。このことは、本研究で使用した社会的責任性の尺度が頼りになるとか、正直、他人のためになることをする、やり遂げるといった特性、すなわち、社会的責任性を「特定的に」測定する上で妥当性を持つと言えよう。

（短縮版の作成）本研究では、44項目が使用された。これは、他の調査項目と併用した場合、児童にかなりの負担を強いる数である。したがって、内部一貫性の高い短縮版を作成する事とした。短縮版の等質性を高めるため、44項目の内、主因子法（バリマックス回転）による因子分析の結果、第１因子に対する負荷量が大きく(.40以上)、項目－全体相関係数が相対的に高い（0.30以上）項目を選定するという方法を併用し、計20項目を選定し、短縮版とした。

（短縮版の信頼性と妥当性の検討）本研究の資料を分析した結果、短縮版の項目－全体相関係数は,.42から.58の間に分布していた（表１)。また、短縮版の内部一貫性を示すα係数は .88であり、高い数値を示した。さらに、スピアマン＝ブラウンの公式による折半法の信頼性係数は.83であった。また、短縮版の再検査信頼性は .72（p<.01）であった。このことは、短縮版が高い信頼性を持っていることを示している。本研究の調査以後、この短縮版を小学校５・６年児童に対して用いた調査(高島、1995）において同様な高い内部一貫性（α＝.87、折半法＝.87）が示されており、項目－全体相関係数も.34から.62に分布しているので、他のサンプルにおいてもおおむね同様な結果が確かめられているといえよう。

妥当性については、短縮版と向１との相関は .55（p<.01)、向２との相関は.57（p<.01)、共感性との相関は.66、協力意識との相関は.49（p<.01）であり、競争意識との相関は見られなかった。したがって、併存的妥当性を持つと言えよう。さらに、Ａ小学校児童のゲス・フー・テストの被指名数と短縮版の合計得点間の相関を算出したところ、「頼りになる」(r=.29,p<.01)、「正直である」(.24,p<.05)、「ためになることをする」(.28,p<.01)、「やり遂げる」(.28,p<.01)、「被指名総数」(.30,p<.01）となり、いずれも正の有意な相関を示した。また、被指名数と他の諸尺度との有意な相関は、全く得られなかった。このことは、短縮版が社会的責任性を「特定的に」測定する上で妥当性を持つと言えよう。

短縮版の得点を従属変数、性別と学年を独立変数とする２要因分散分析を行ったところ、性別の主効果のみが有意であった（Ｆ＝35.64，df=1／334，p<.01)。このことは、女児が男児よりも得点が高いことを示している。

本研究で作成した社会的責任性尺度の具体的項目（短縮版）と、平均、標準偏差、項目－全体相関係数は、Table.１に示してある。

考　　察

態度尺度をリカート法で作成した場合の内部一貫性の基準をα係数で示した場合の基準を.80以上とする見解（安藤，1987）に立てば、本研究で用いた社会的責任性尺度は、この基準を満たす高い内部一貫性や折半法による信頼性係数を示している。再検査信頼性も２カ月半後の実施にも関わらず、比較的高い有意な値を示すことから、信頼性をもつ事を示している。

さらには、他の尺度との併存的妥当性を検討した結果、競争意識尺度以外の理論的に関連が深いと想定される全尺度と中程度以上の有意な正の相関が得られ、併存的妥当性が確認された。一方、ゲス・フー・テストの結果、他の尺度との相関は全く得られず、ゲス・フー・テストと社会的責任性の間にのみ正の有意な相関が得られた。したがって、本研究で作成された尺度は、Harris（1957）の社会的責任性を「特定的」に測定する上で妥当性を持つといえよう。

本研究では、社会的責任性尺度の短縮版の信頼性と妥当性の検討を行った。高い信頼性と妥当性が確認され、また、他のサンプルを用いた結果でも信頼性が確認されていることから、使用可能であることが示された。短縮版においては、性別の主効果のみが有意であったので、短縮版を使用する場合には、性別の効果が考慮されなければならないことを示している。

このように、本研究で作成された小学校高学年用の社会的責任性尺度の短縮版は、高い信頼性と妥当性を持ち、小学校高学年児童に適用可能であることが示されたと言えよう。

しかし、成人において、社会的責任性と遅延満足行動（Mischel,1961a;Witt, 1990）や統制の位置（Chebat, 1986）との関連が確認されており、今後、児童においてもこうした側面との関連性を検討することも課題として残っている。一方、成人において、社会的責任性には社会的望ましさの要因が影響及ぼすという見解（Stone, 1965）もあり、社会的望ましさとの関連も、今後、検討を要する課題であるといえよう。

引用文献

新井眞人 1993 子どもの手伝いの変化と教育　教育社会学研究，53集, 66-86.

安藤清志1987 第10章　態度・性格尺度の構成　末永俊郎（編）社会心理学研究入門　東京大学出版会，149-165.

Benson, P.L., Dehority, J., Graman, L., Hanson, E., Hochschwender, M., Lebold, C., Rohr, R., Sullivan, J. 1980 Interpersonal correlates of nonspontaneous helping behavior. *The Journal of Social Psychology*, **110**, 87 - 95.

Buss, A, H. 1986 *Social Behavior and Personality*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 大渕憲一（監訳）1991 対人行動とパーソナリティ　北大路書房

Berkowitz and Daniel 1964 Affecting the salience of the social responsibility norm: Effects of past help on the response to dependency. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **68**, 27 5 - 281.

Berkowitz and Lutterman 1968 The traditional social responsible personality. *Public Opinion Quartarly*, **32**, 169-185.

Chebat, J. 1986 Social responsibility, locus of control, and social class. *Journal of Social Psychology*, **126**, 559 - 561.

Goodnow, J. J. 1988 Children's household work: Its nature and functions. *Psychological Bulletin*, **103**, 5 - 26.

Gough, H. G., McClosky, H., and Meehl 1952 Apersonality scale for social responsibility. *Journal of abnormal and social psychology, Vol.**47**, 73 - 80.*

Eisenberg, N. and Mussen,P.H 1989 *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press.（菊池章夫・二宮克美　共訳　思いやり行動の発達心理　金子書房）

浜崎隆司　1991　幼児・児童における向社会的行動の動機づけ要因としての共感性　幼年教育研究年報，第13巻，25-34.

Harris, D. B., Clark, K. E., Rose, A. M., and Valasek, F. 1954a The measurement of responsibility in children. *Child Development*, **25**, 21 - 28.

Harris, D. B. 1957 A scale measuring attitude of social responsibility in children. *Journal of abnormal and social psychology*. **55**, 322 - 326.

菊池章夫 1988 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店

松崎学・浜崎隆司 1990 向社会的行動研究の動向－内的プロセスを中心として－　心理学研究，**61**，193-210.

丸山純一・清水　裕　1990　愛他行動と人格諸特性との関連について 日本教育心理学会第32回総会発表論文集，216.

Midlarsky, E., and Bryan, J. 1972 Affect expressions and children's imitative altruism. *Journal of Experimental Research in Persnality*. **6**, 195 - 203.

Mischel, W. 1961a Preference for delayed reinforcement and social responsibility. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 1 - 7.

O'ccornner, M., and Cuevas, M. 1982 The relationship of children's prosocial behavior to social responsibility, pro social reasoning, and personality. *The Journal of Genetic Psychology*, **140**, 33 - 45.

Rushton, J. H., Chrisjohn, R. D., and Fekken, G. C. 1981 The altruistic personality and the self-report altruism scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293 - 302.

佐藤ゆかり　1985　福島大学教育学部卒業論文（未発表）（この内容は、菊池 1988の記述を参考にした。）

桜井茂男　1986　児童における共感と向社会的行動の関係　教育心理学　研究第34巻，54-57.

桜井茂男　1987　自己効力感が学業成績に及ぼす影響　教育心理，35巻，140-145.

桜井茂男　1990　両親及び自己の共感と向社会的行動の関係　実験社会心理学研究，第30巻，101-108.

Staub, E. 1970 A child distress: The effect of focusing responsibility on children on their attempts to help. *Developmental Psychology*, **Vol.2**, No.1, 152 -153.

Stone, L. A. 1965 Social desirability correlates of social responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **2**, 756 - 757.

祐宗省三・堂野恵子・松崎　学　1983　思いやりの心を育てる　有斐閣

高島聡子　1995　子どもの家庭内でのお手伝いに関する研究　平成６年度島根大学教育学部卒業論文（未公刊）

田中昭夫　1993　児童の家庭内での手伝いが共感性・社会的責任性・競争性に及ぼす効果　日本心理学会第57回大会発表論文集　p.107.

田中昭夫　1994ａ 児童の家庭内での手伝いが社会的責任性に及ぼす効果，日本教育心理学会第36回総会発表論文集，p.63.

吉田真希子　1986　向社会的行動に関する一考察　福島大学教育学部卒　業論文（未公刊）（この内容については、菊池，1988及び横塚，1989の記述を参考にした。）

横塚怜子　1989　向社会的行動尺度（中高生版）作成の試み　教育心理学研究，第37巻, 158-162.

White, L. K., and Brinkerhoff, D. B. 1981a Children's work in the family: Its significance and meaning. *Journal of marriage and the family*. **43**, 89 - 793.

Witt, L. A. 1990 Person-situation effects and gender differences in the prediction of social responsibility. *The Journal of Social Psychology*, **130** (4), 543 - 553.

（付記）この調査研究の元になった資料は、岡本智美さんが収集した。資料の使用を許可いただいたことに感謝します。なお、調査にあたり、松江市立古志原小学校と城北小学校の先生方・児童の皆さんには、大変ご協力をいただいた。心より感謝申し上げます。

Table 1. 小学校高学年用社会的責任性尺度の各項目の平均、標準偏差，Ｉ－Ｔ相関　（短縮版有効数、Ｎ＝338）

項　目　（Range=1-５）　逆転項目（R）	平均(SD)	I-T相関
１．どんなことでも、はじめたことを終わりまでやり通すことは、とても大事なことです。	4.58(0.70)	.498
２．学校で先生がわたしたちに十分に問題を出していないときでも何をしたらいいかすぐわかります。	3.38(0.95)	.422
３．わたしたちは、じぶんの国のことを心配したり、世界のほかの人々が自分たちを大事にしたりするようにするべきです。	4.18(1.04)	.431
４．クラスの係の仕事をするとき、やり方の計画を立てたりするのは、ほかの人にまかせます。（R）	3.76(1.07)	.436
５．はじめたことは、終わりまでやることが大事です。	4.34(1.04)	.426
６．わたしは、先生がクラスにいなくても勉強をつづけることができます。	2.99(1.21)	.472
７．わたしは見張られていなくても、わたしが仕事をすると他の人は信じています。	2.84(1.04)	.438
８．わたしは、いえや学校のつまらない仕事ででもできるだけよくなるようにやろうとします。	3.28(1.14)	.589
９．ほかの人にしょうじきだということが、とても大事なことです。	4.02(1.17)	.562
10. 自分がとくするためにがんばるより、クラスやチームのためにがんばるほうが、もっと大事だと思います。	4.20(1.03)	.509
11. わたしは、ともだちが私に何かを期待しいるとき、けっして友だちをうらぎりません。	3.93(0.99)	.464
12. だれも、じぶんの町や市が良くなるために、じぶんの時間をつかうべきだと思います。	3.64(1.06)	.440
13. もし、だれもが元気で仕事にとりかかれば、いつも仕事をやってしまうことができます。	3.96(1.03)	.511
14. 近所の人があなたのために何かしてくれたら、その人のために何かをしてあげることは、とてもよいことです。	4.61(0.80)	.544
15. 自分がやって楽しいことより、大事なことを先にすべきだと思います。	3.99(1.11)	.461
16. だれかにやり方をおしえてもらうよりも、わたしは、自分ひとりでいろんなことをやりとげます。	3.42(1.09)	.426
17. わたしは、学校の行事（運動会や学芸会）のとき、進んでクラスためになるかかりをします。	3.12(1.15)	.489
18. なにか仕事を与えられたとき、わたしがしたいことがあっても、その仕事をがんばってやります。	3.86(1.02)	.448
19. どんな人でも、できるだけがんばって、自分の仕事をするべきです。	4.31(0.91)	.576
20. わたしがやりそうだと思われている仕事を終わりまでできなかったとき、いやな感じがします。	4.17(1.01)	.507

＊逆転項目は、最後に（R）で示している。